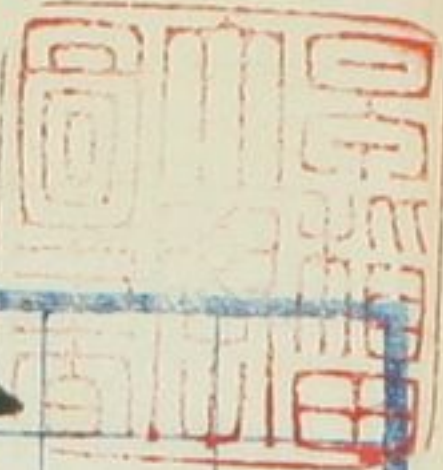




荀
卿
倫
理
學

特 別
□ 9
4438





り	ん	直	討	る	を	を	行	實	先	荀
斯	と	接	究	に	整	談	を	際	秦	卿
学	す	天	し	あ	一	せ	重	の	の	の
の	る	下	之	り	得	ず	せ	必	儒	倫
始	か	焦	を	撰	可	吾	り	要	學	理
祖	如	肩	廣	言	き	人	斯	に	は	學
孔	き	の	く	せ	か	は	學	應	擾	
子	は	急	普	ば	を	如	の	い	亂	
の	敢	を	際	倫	講	何	教	隆	せ	
博	て	救	に	常	明	に	旨	起	る	
識	斯	ふ	施	を	し	し	を	社	會	
な	学	に	行	標	治	て	要	會	醜	
る	の	足	せ	と	國	現	言	専	惡	
其	目	ら	ん	た	平	世	せ	ら	なる	
學	的	さ	と	し	天	に	ば	救	時	
の	と	る	す	日	下	於	實	世	勢	
規	な	宇	る	常	の	て	に	的	に	
模	さ	内	に	の	經	其	現	精	對	
宏	る	の	在	安	倫	身	世	神	す	
社	所	玄	り	學	に	心	を	を	る	
な	好	理	而	推	推	を	費	公	反	
る	き	を	し	及	及	考	心	貴	抗	
不	固	探	て	應	應	め	を	公	的	
完	よ	究	夫	用	用	其	末	貴		
全	よ	せ	の	す	す	家	末	踐		

性悪説の由来 第一性悪説
 性悪説の由来 儒學はか
 ありしに拘はらす其主眼常に倫理の構設にありしを以て
 性理思想は在來儒家の既に多少抱有せる所に於て孔子
 思を經孟軻に至りては其研究大に度を進め遂に其學説全
 体の立脚地となれり然れども彼等は皆性善論者にして其
 所説必ずしも精細ならず未だ天下の疑惑を氷解するに足
 らざる點多かりき茲を以て孟軻の項既に性有善有不善と
 唱ふる人^{其何人なるか}を詳^{孟子に}にせ^{あり}あり其理由とする所
 は是故以堯為君而有象以瞽瞍為父而有舜以紂為兄之子且
 以為君而有微子啓王子比干^子と云ふに在り所謂簡粗而
 かち日常の事實に基ける説にして少からぬ真理あり又告

第壹章 倫理學の心理的立脚地
 點子著目せよ
 放たれ現時尙赫耀たる光輝の少なからず存あり何ん
 や彼か性悪説を唱導し基礎を茲に擡ぐ倫理學を組成せし
 せるは増むへきも其研究大に進歩し斯學に特有なる性理
 的研究益々精緻に赴き爛々たる異彩は荀卿の手に依りて
 に再挫殆人と全く排除せられたり其學科の範圍痛く縮少
 せられたり其研究は益々實踐學の必要
 きた論なきのみ而して孔子没後時勢は益々實踐學の必要
 や促し宗教的又形而上學的方面の研究は孟軻に一頓荀卿
 々明かなりて雖も其主眼實踐的倫理學の構設にありしや
 する觀念は幾分か宗教的又形而上學的趣味を含蓄するこ
 ちからも其の易理は以て宇宙觀にして見つ可く其天に對

子は性無善無惡也と主張し盛に孟軻に抗辯せり其説に曰く性猶湍水也決諸東方則東流決諸西方則西流人性之無分於善不善也猶水之無分於東西也要するに一種の経験説にして單簡なからも充分孟軻の性善説に對抗し得可き真理アリ而して當時之れに類せる説を樹てたる人さへありき孟軻は告子を駁するに人性之善也猶水之就下也也此の如し水の高きに上り人の惡に奔る共に此本性にあらすや論せり然れども其擊正鵠を失せり何となれば大宰春臺の既に有破せし如く告子の本旨は水性を以て直に人性に比せしに非ず只が湍水の人の決し様如何に依り或は西に或は東に流るしか如く人性外圍の影響如何に依り或は

惡或は善となるべしと云ふにありしを以てなり蓋し孟軻自説の論據薄弱窮辭茲に至りしやも計られず而して荀況に及びては遂に性惡説を唱へ其所説中孟軻性理思想の一端に於て見る能はざるに至りぬ今荀卿が性惡説の由來を遠きに尋ね歴史的に思想變遷の跡を觀すれば或る人の性有善有不善説と告子の性無善無不善説とに多少關聯する所なしと云ふ可らず蓋し告子等の性理説は既に在宋儒家の性善説を破らんといふより一轉したる思想にして再轉せは當に荀卿の性惡説に至るべき橋梁たりしを以てなり史繩祖か荀卿言性惡中實基於告子也と言へりしは是なり然れども荀卿が再轉の動機正に時勢にあり吾人は到底茲に時勢の偉力を無視する能はず四庫全書總目に言ふ荀卿

ず抑々在來の性善論者が性善なる理由とする點を觀する
 一面古代其民族間に熾に唱導せられ天道是説を信じ天人
 の如きは往々如く又ならず可らずの理由を明證する方便とし
 軒の如きは往々如く又ならず可らずの理由を明證する方便とし
 四端既發の性を持ち來り逆戻的に人皆な四端を先見する
 か故に性未発の四端善なりと説明せし趣あり然れども深
 く其根柢を叩けば彼亦在來の性善論者と同じく天道是誠
 なるが故に之に依りて賦與せられたる人性善ならず可
 りずと思惟せしや明かなる可し然れども荀卿に至りては
 天道を解するに物理的說明を以てし一面天地に對し懷疑
 し天道是説を排するや共の人に天人相關説を否み天行有常不

人恃性善之説任自然而廢學因言性不可恃當勉力於先王之
 教と要は荀御眞に人性惡なりと信せしにあらす寧ろ人性
 の矯正策として斯く説けりとの説にし我か祖徳の如き
 亦之に類せる説をなせり往古來今衆俗矯正の方便としん
 説を樹つる救世家次して斯く少なるをせば吾人敢て此
 説を排する能はずと雖も寧ろ荀御深く時勢の腐敗人情の
 澆薄に感し其善者少不善者多學を目撃し人性惡なりと觀
 せり云ふを以て穩當なりと信ず縱令又四庫全書なるの
 説を可とせずも荀御か矯正策として人性を説明する所に
 多少時勢と關係する所はしと云ふ可らず今又假に時勢の
 關係を離れ思想の上に於ける歴史的關係を省みず彼が性惡
 説の起因を考ふれば終に彼か天道の解釋に歸せざるを得

斯學專門學士の所説なりとせば豈奇異ならずや
 性惡説性とは何ぞや荀卿の解に從へば凡性者天之就也
 不可學不可事能注不謂而疾也惡性また生之所以然者証なり現
 今心理學上に云ふ本能にして盲目的に活動するものなり
 而して荀卿は其活動常に不道德的なるか故に之を惡と云
 ふなり其所説の大要を叩くに人之生固小人無師無法則唯
 利之耳際人性自然の狀態より云はし決して禮讓仁義を守
 り正理平治に向ふものにあらず否な必然的に偏險悖亂に
 奔り相視奪殘害して己ます父子兄弟の間も雖も決して和
 合一致を係つて能はざるなり然則從人之性順人之情必
 出於爭奪合於犯分亂理而歸於暴若し夫れ今人飢渴長を
 人敢て飲食せず將に讓る所あらんやし勞憊敢て休憩を希

為堯存不為桀亡應之以治則吉應之以亂則凶道と論し尺管
 人為に重きをかけり荀卿は性善説を排する少くも之を
 主張せざる可らざる要なき理由は實に茲に存せり而して
 時勢等前述の諸因により彼は遂に性惡説を唱導するに至
 りぬ彼が特性茲に關與して力ありしは固より敢て論せさ
 るのみ人或は云ふ荀卿子夏の隆禮説に私淑せるの極性惡
 説を存せり吾人亦敢て子夏の隆禮的傾向か荀卿の隆禮
 説を生みたることとを否ます然れども之か為に性惡説起れ
 るにあらざる性惡説起りて之れありしなり何と為れは荀卿
 は性惡と觀せるか故にこれ隆禮を説くが故に性惡を觀
 せしにあらざればあり論者の説の如きは固も然かも是れ
 也因となすもの其非理なる固より論なきのみ然かも是れ

者	を	然	辭	こ	礼	や	言	思	と	ら	果
情	情	ら	を	は	也	從	し	意	認	す	の
之	の	は	究	既	も	つ	得	せ	め	面	觀
應	自	苟	追	に	苟	て	べ	し	さ	御	察
也	發	御	し	明	御	性	き	如	り	の	と
(名)	に	性	て	か	は	惡	か	く	し	真	其
性	帰	其	難	なる	多	說	寧	性	い	意	源
情	せ	物	問	處	く	遂	ろ	必	せ	果	因
二	し	の	を	又	の	に	偶	然	よ	し	の
者	が	惡	狭	當	場	成	然	的	又	て	觀
は	如	なる	む	に	合	立	に	好	惡	茲	察
必	し	所	を	明	に	せ	惡	利	認	に	の
す	彼	以	欲	か	於	さ	も	疾	め	あ	差
相	が	を	せ	なる	て	る	生	惡	さ	り	異
伴	解	何		可	直	至	じ	等	り	せ	に
ふ	に	處		し	性	る	善	の	し	は	歸
も	依	に		吾	其	可	も	惡	以	彼	せ
の	れ	求		人	物	き	起	に	上	敢	り
に	ば	め		は	を	に	る	の	は	て	と
し	情	し		板	惡	あ	可	み	は	性	云
て	者	や		葉	以	ら	き	奔	は	其	け
其	性	彼		の	說	す	に	る	は	物	さ
相	之	は		言	け	や	あ	と	は	を	る
互	賢	之			り	然	ら	と	は	善	可
の	欲							斷	か		

一	性	易	朴	め	耳	朴	節	君	惡	性	は
說	の	き	資	す	性	之	に	子	な	性	ず
以	結	か	の	固	と	於	所	之	り	於	將
孟	果	故	存	より	云	美	謂	與	と	情	に
軻	の	に	在	善	へ	心	性	小	明	性	他
の	方	惡	を	と	り	意	善	人	言	照	に
性	面	なり	容	認	し	之	者	其	し	惡	代
善	に	と	る	め	察	於	不	性	て	說	る
等	着	と	し	す	す	善	離	一	曰	と	所
一	目	斷	性	既	れ	若	其	也	く	凡	あ
說	立	する	性	に	は	夫	朴	性	人	之	ら
と	論	もの	其	性	彼	可	而	又	之	性	と
の	せ	い	資	中	敢	以	美	然	性	者	す
差	し	し	朴	に	て	見	之	れ	者	竟	る
異	か	して	を	其	本	之	不	も	毫	舜	が
主	如	彼	離	善	具	明	離	苟	之	之	如
と	し	が	る	と	の	不	目	御	與	盜	き
し	然	性	、	なる	性	離	以	が	盜	跖	此
て	ら	は	故	べ	其	目	聰	孟	其	其	二
性	は	彼	に	き	物	聰	之	軻	性	一	行
に	か	性	又	素	を	之	也	辦	一	者	皆
對	性	惡	離	即	惡	使	夫	駁	性	反	於
する	惡	說	札	ち	又	夫	資	の	一	於	
結	等	は	寧	る	寧	資	一	也	也		

能	す	智	人	行	決	し	也	等	は	ら	へ
く	る	識	の	以	し	は	証	一	意	ち	三
荀	好	を	本	て	て	シ	と	く	欲	の	は
卿	方	増	性	こ	消	ヨ	信	又	衝	哲	ヨ
の	便	さ	は	れ	滅	氏	し	荀	動	理	氏
學	な	し	決	を	せ	が	強	卿	に	一	が
理	る	を	し	抑	す	吾	勉	が	ま	に	自
に	を	利	て	制	と	人	修	欲	り	に	家
符	悟	他	變	せ	論	本	徳	不	欲	立	の
合	り	の	す	ん	し	性	一	可	求	ち	哲
せ	徳	利	者	と	か	の	言	盡	の	吾	理
る	を	已	に	せ	ら	意	せ	可	念	人	一
を	行	り	あ	し	一	欲	ば	以	常	の	萬
認	ふ	も	ら	比	方	各	積	て	に	本	有
む	に	却	す	す	に	自	偽	之	知	性	皆
彼	至	て	と	可	智	其	を	以	々	も	意
か	る	本	雖	し	力	種	て	之	た	り	意
言	と	具	も	殊	の	類	が	が	と	り	欲
に	云	の	教	に	發	を	方	方	論	と	の
曰	へ	意	育	シ	達	異	便	論	し	歸	發
く	り	欲	は	ヨ	に	に	と	し	た	し	現
材	し	を	吾	氏	依	す	難	求	る	吾	に
性	は	完	人	が	り	と	も	可	に	人	外
知	最	う	の	吾	徳	難	も	節	に	及	及
能	も										

性	す	に	理	荀	あ	た	之	へ	の	の	關
の	る	非	の	卿	り	し	所	は	如	み	係
貝	も	才	深	と		情	以	情	し	あ	恰
す	の	然	奥	シ		を	不	は	性	り	か
る	あ	れ	なる	ヨ		質	見	性	情	て	る
や	り	と	其	ベ		と	也	之	の	性	物
雖	荀	も	組	ン		な	各	好	表	な	の
為	卿	右	織	ハ		せ	要	惡	裏	き	表
門	か	に	の	ウ		る	す	喜	す	能	裏
守	吾	評	宏	エ		性	る	怒	る	は	の
欲	人	論	社	ル		は	に	哀	所	ぶ	如
不	本	した	に	シ		常	彼	樂	欲	而	く
可	具	る	し	ヨ		に	は	解	必	し	性
去	の	所	て	氏		欲	情	に	す	て	の
雖	性	願	整	は		の	自	以	茲	欲	み
為	は	る	然	輒		為	發	欲	起	は	あ
天	情	シ	た	近		に	を	為	る	表	り
子	を	ヨ	る	獨		惡	以	可	故	裏	て
欲	質	氏	到	乙		に	て	得	に	合	情
不	と	の	在	の		陷	性	而	彼	し	な
可	及	説	荀	大		る	惡	求	の	て	き
盡	す	に	卿	哲		と	の	之	言	成	能
証	か	符	の	其		云	因	情	に	れ	は
と	故	合	敵	哲		ふ	と		從	る	す
考	に					に				物	情

る	り	る	説	共	い	解	然	を	を	要	た
を	幾	を	心	に	害	す	れ	以	を	す	り
把	多	多	醉	荀	有	る	も	て	否	る	彼
憂	の	と	し	脚	る	や	荀	人	む	た	か
と	難	綱	孟	か	か	シ	脚	生	も	凡	教
な	點	せ	子	性	如	ヨ	は	究	の	と	育
さ	茲	さ	有	惡	く	氏	決	竟	思	思	説
す	に	る	大	說	思	に	し	の	考	の	起
又	存	可	功	の	惟	類	揚	目	し	起	點
敢	す	ら	於	旨	し	す	朱	的	切	點	實
て	へ	す	世	を	排	と	の	は	に	に	道
世	き	宋	儒	誤	休	全	如	一	道	茲	在
を	も	一	言	解	甚	く	一	毛	を	在	り
厭	シ	派	其	揚	だ	又	毛	生	人	性	矯
ふ	ヨ	の	性	朱	力	揚	を	惡	生	矯	飾
の	氏	徒	善	の	め	朱	扱	な	性	矯	飾
念	の	頻	也	為	の	に	き	れ	矯	飾	せ
な	隠	り	難	我	荀	似	天	ば	飾	せ	ん
り	迹	に	な	説	脚	たる	下	こ	と	力	め
し	義	孟	と	の	か	る	を	と	と	力	め
を	に	軻	補	如	性	點	利	積	と	力	め
以	流	の	す	く	の	あり	す	偽	と	力	め
て	れ	性	と	世	質	り	こ	を	と	力	め
た	さ	善	と	教	を				と	力	め

聖	と	奉	距	と	世	正	益	が	君	所	君
人	企	じ	る	し	家	に	あ	有	子	以	子
君	圖	積	遠	て	たり	シ	り	徳	は	未	小
子	せ	偽	し	頻	り	ヨ	と	なる	其	之	人
と	し	敵	何	り	意	氏	の	も	小	道	一
なり	切	以	と	に	欲	の	説	畢	人	則	也
り	なり	て	た	隱	消	説	に	竟	と	異	好
得	可	し	れ	迹	滅	に	合	か	等	矣	榮
し	と	を	荀	を	法	一	す	為	し	辱	辱
信	じ	以	矯	勸	を	講	後	に	欲	二	好
敢	て	たり	飾	焚	する	する	詳	自	求	此	利
て	能	利	し	能	に	に	細	家	の	に	惡
欲	く	己	利	く	急	急	の	福	念	依	善
の	ま	的	ま	ま	たり	る	競	利	熾	り	是
消	る	快	も	も	は	遂	明	己	ん	て	君
滅	る	樂	利	利	既	に	は	的	な	之	子
す	萬	を	己	的	に	之	然	快	る	を	小
可	人	完	的	快	荀	れ	れ	樂	もの	論	人
か	一	から	樂	樂	脚	か	ヨ	説	に	せ	之
ら	様	し	主	主	の	一	氏	の	に	ば	所
さ	に	め	義	義	旨	端	ハ	一	最	彼	同
		ん	を	を	を	に	厭	に	も	が	也
						使		使	君	所	若
						子		子	謂	其	其

性惡と移善の動機 荀卿謂へらく君子小人其性一也而して彼等其如く行為に於て著しき差異あるに至りし所以一に積偽の如何に在り今之人他師法積文學道禮義者為君子縦性情安忍睚而違禮義者為小人性惡説要言せば吾人の同うする所のものは性又情異にする所のものは偽なり性情惡たりと雖も師法之化と禮義之道とに據り之を矯化せば何人も一様に聖人君子となり得可しと云ふにあり吾人は彼か如く積偽を尊重せるを多とす然れども人性果して惡なりば何故に吾人は性に反し善事を行ひ得可きか彼か言へりし如く性積偽に矯化せらるるか故に吾人は性に反し善事を行ひ得可きか彼か言へりし如く性積偽に矯化せらるるか故に吾人は性中既に積偽を受け容るゝ部分即ち

善なる部分の存在を認めらるものにして性惡説維持し難きにあらざるなきか彼か比喩に曰く拘木の隈括烝矯然後直純金必得待絜礪然れども拘木の隈括烝矯を待ち直となり純金の礪礪により利となるは拘木純金中既に直となり此の善分子なくんば師法禮義も之を矯化する由なく御更に理由を掲げ自説を維持せんとせり其言に曰く夫薄願厚惡願美狹願廣貧願富賤願貴苟無之中者必求於外故富而不願財貴而不願勢苟有之中者必不及於外用此觀人之欲為善者為性惡也今人之性固無禮義故疆學而求有之也性不

知禮義故思慮而求知之
類論辭甚巧所說一理
有可然者
荀卿之言の如く吾人の多くか貧賤に居り富貴を希ふは疑
なき事実にして又富貴を得て財賈權勢を望まざるも事實
を希ふは疑なき事實にして又富貴を得て財賈權勢を望ま
ざるも事實なるべし然れども必ずしも然りと断言する可
ら才嚴密に云へば富貴貧賤之來比較的語にして内にあり
と云ひ内にたしと云ふも願る曖昧なり今暫らく此問題を
外にして論ずるも世には呉を得て蜀を望む人多し富貴を
得て更に大なる富貴を欲する人あり又或は之に反し清貧
に甘んじ敢て富貴榮達を求めざる人あるは吾人日常の經
験に徴して判然たる事實なり荀卿如何に強辯するも之を

否不能はす又彼か富而不願財貴而不願勢と云へりしは自
説——性惡にして貪婪能くなしとの説——を破する所以
にありすや然らば彼人性中禮義なきか故に強學思慮之を
知得せんと言するなりと云ふも吾人首肯する能はず論者或
は云は人荀卿か譬喩を究追して直に其性惡進善説を排す
るは陋なりと然らば直に難す可し荀卿が人之欲善焉者為
性惡也と云へりしは正しくこれ性惡なるか故に道徳的勤
機起ると論せる所以にしく其意を推せば性惡却て結果に
於て善性善却て結果に於て惡吾人の望むべきは性惡にし
て敢て積偽以て性を矯飾するの要を見ざるなり何となく
は彼か論法を藉りて云はし性善ならんか道徳的勤機決し
て斯す可らず寧ろ不道徳的勤機起る可ければなり要する

に苟無之中者心求於外苟有之内者必不及於外也の断定は
事實に反し進善の理由を説明するに足らざるなり
質及具と移善の動機 荀卿も茲に氣附き到底性惡説上よ
り移善の理由を説明する能はざるを悟り徹然論法を改め
仁義法正には可知之理と可能之理との客觀的存在を認め
吾人はいは一樣に性以外に可以知仁義法正之質と可能仁
義法正之具との主觀的存在を信じ主觀之質具客觀の理に
應し道德的動機茲に起り仁義法正を知り且つ行ひ得可く
萬人皆聖域に達し得可しと云ふにあり其論精緻誠に後人
をしい其卓識に驚服せしむるものあり曰く凡禹也所以爲
禹者以其爲仁義法正也然則仁義法正有可知可能之理然則
塗之人也有可以仁義法正之質有可以能仁義法正之具然則

其可以爲禹明矣今以仁義法正無固可知可能之理邪然則唯
禹不知仁義法正不能仁義法正也將使塗之人固無可以知仁
義法正之質而固無可以能仁義法正之具邪然則塗之人也且
内不可知父子之義外不可知君臣之正不然今塗之人者皆内
可以知父子之義外可以知君臣之正然則其可以知之質可以
能之具其在塗之人明矣今使塗之人者以其可以知之質可以
能之具夫仁義之可知之理可能之理然則其可以爲禹明矣
茲に至り進善の動機道德的行為の説明詳かになれり質及
は之を性惡篇中に論せりと雖も他所に就き考ふるは共に
性情以外に存する心的能力はして彼か意味する心の要素
なることと定かなり荀卿が一面性惡説上より道德的動機を

說明せんやせし點のみを觀れば間々其論理の精巧其思想の奇技なるものあるに拘はらず又頗る極端説にして論たるを兒かれず雖も終に性の外に心質具を待ち来り一切の道德的動機を茲に求めんとせしは大に見る可きの點なり但し彼が性の質たる情を惡のみ觀せしは恰かも孟軻が之を善とのみ觀せしと共に極端偏見なりとの非難を兒かる可らず又彼が如何に質具の主觀的偏在理の客觀的存在を説くも雖も萬人一様に聖域に達し得可しと説きしは遂に想像説たるに過ぎざる可し其理由は次章に詳論すべし

孟軻對荀卿支那倫理學者中性理説上最も氷炭相容れざる觀念を拒きし學者を荀孟二氏となす孟軻の意を推すに

性は心四端の大本朱子の解に従へは心の理にして何人も之を先見し常に心をして惡を避け善に就かしむる道德的本能なりとの難性は未發のものなる故に彼は往々其善を證するに既発の四端或は良能智偏在説を以てし實際彼が直接也猶其有四體也公孫の説一を以てし實際彼が直接に性の善を説けるは略ぼ人性之善也猶水之就下也云々詰上の一語に盡く顧炎武が孟子論性專以其發見於情者言之と云へりしは之を言ふなり蓋し孟軻の四端又良能良知は共に情に屬するものなり蓋し孟軻の四端又良能良知は三が情なることは別に言を要せず唯た是非の心の如きは如何にも字義上知に屬するか如きも彼は道德的本能に依り彼が是非之心智也と説きしは恐らくは道德的本能に依

を	が	意	に	り	き	賦	進	き	異	以
以	共	せ	云	り	其	と	善	人	同	上
て	に	し	へ	と	善	云	の	間	を	論
二	善	如	ば	も	或	ひ	動	に	一	述
氏	の	く	當	此	は	或	機	對	譬	せ
の	標	絶	然	一	惡	は	を	す	す	る
善	準	對	る	致	の	天	茲	る	所	に
或	を	的	べ	は	因	の	に	一	に	依
は	定	反	き	適	を	就	求	元	孟	り
惡	め	對	荀	絶	情	云	二	論	を	は
形	さ	と	卿	對	の	云	元	主	張	性
容	り	た	か	的	自	本	論	張	し	心
的	し	ら	絶	反	發	能	を	荀	の	本
比	を	す	對	欠	歸	の	意	卿	は	性
較	云	て	的	點	せ	に	解	は	心	は
語	ふ	止	反	あ	る	や	正	性	の	荀
な	り	み	對	り	所	し	等	二	外	卿
る	に	ぬ	も	志	以	く	一	氏	に	が
に	其	何	實	か	た	相	り	が	に	の
過	理	そ	際	故	り	一	り	性	心	發
き	由	や	彼	に	然	致	と	を	を	現
す	は	二	が	嚴	れ	せ	天	說	と	說
又	後	氏	が	密	れ	世	の	き	說	の
或	茲	氏	思	密	れ	說	の	き	說	の

の	良	な	親	と	も	能	隱	寧	れ	て	り
桃	智	り	なる	を	も	良	羞	ろ	ば	て	り
の	の	二	る	區	實	知	惡	感	は	通	盲
種	本	者	は	別	際	は	辭	別	是	常	目的
子	体	の	仁	せ	は	心	讓	たり	非	謂	的
子	た	情	に	さ	は	理	是	と	心	ふ	に
り	る	に	し	り	此	學	非	と	判	思	又
生	性	屬	て	去	の	に	是	解	別	慮	感
せ	の	する	良	が	如	云	情	する	力	去	情
さ	情	る	能	如	く	ふ	也	る	も	判	的
る	質	な	長	し	明	意	と	方	自	別	道
可	ら	知	に	何	別	と	の	適	余	す	德
ら	ら	り	敬	と	せ	知	說	當	の	る	上
さ	さ	ぬ	た	な	さ	と	に	た	三	の	の
る	可	可	る	は	の	該	賛	ら	端	義	是
か	か	然	は	義	み	當	同	ん	と	に	非
く	ら	ら	に	に	な	す	せ	吾	全	あ	を
に	さ	ば	く	解	ら	る	ん	人	じ	り	判
定	る	心	て	に	ず	が	と	は	く	さ	別
か	は	四	良	依	又	如	欲	茲	識	り	す
なり	桃	端	知	る	二	し	す	に	別	し	る
り	の	及	た	に	者	然	又	朱	に	ら	の
	萌	良	れ	親	と	れ	彼	子	あ	ん	謂
	芽	能	は	に	四	と	が	が	ら	ん	に
					端		良	側	去	し	し

は孟軻の意味たる善即ち荀卿の意味たる惡孟軻の惡即ち
荀卿の善なるやも計る可らず從つて二氏の性其名を異に
にするのみにして實際其質を同するやも保す可らず又
或は真正の善孟軻の善にあらす却て荀卿の惡にして荀卿
か性惡説こそ却て真正の性善説ならんも知る可らず蓋し
想ふに二氏は常識の上に立ち容易に性の善惡を解釋せし
たらんも科學的に推究せば此の如き疑問を挾まざるを得
す荀卿が孟軻を抗辯する恰かも羅針盤なしに北斗を準ふ
か如き觀なき能はず正確の勝利は固より得難き所以なり
今又假りに二氏の善惡の標準實際一致せりとするも二氏
の性生得既に堯舜の性と桀跖の性の間に存する差異の
如き甚たしき懸隔あるにありざるなり孟軻は性善天賦説

を唱導せしに拘はらば終に存養擴充の必要を説くに至り
しを見れば其性生得既に堯舜の性の如く圓満なる善にあ
らすと思意せしや疑ふ可からず又荀卿は性其物を惡と斷
し必然に惡に奔ると云へりしに拘はらす荀卿は性其物を惡と斷
性の自然的發展の極と思意せしや疑ふ可からず然らば二
氏の性は其自然的發展の結果に於てこそ堯舜桀跖の相異
あり然れども状態より云はば非常なる差異あるにあらさ
るなり然れども差異は即ち差異なり茲を以て荀卿孟軻を
駁するや切なり駁擊寧ろ枝葉に涉れる趣なきにあらぬと
もまた至理の存するあるを見る其一節に曰く性善則去聖
王息禮義矣性惡則興聖王貴禮義矣故陳枯之生為拘木也繩
墨之起為不直也立君上明禮義為性惡難孟軻か四端説に於

て天賦経駁中説を採り存養擴充を説ける點のみを觀せ
は荀卿が駁して性惡なるはこれ聖王立ち禮義を制するを
要するなり云へり是は可なりと性善なるは聖王禮義
を要せずと斷せしは正鵠を失ふたりと云はざるを得ず蓋
し孟軻は四端は性道德の種子より發生せる道德の萌芽に
して自然に善に向ふ可き質を有すなりと云ふに惡風に大折
せられ易きか故に修養せざる可らずと云ふにあればなり
然れども何故に純善なる性より惡風に大折し易き染感志
易き四端發生せしや四端純善ならかを何ぞ惡風に感染す
ることありんや又何ぞ修養を要せんや若し之を要せ
ずと云はし心純善ならず從つて性亦純善ならずと定
かなり何となれば源性情ふたて未心濁るの理なく未の濁

れるは源の清からざるを證するに足ればなり此點に着目
せば荀卿の駁撃凱切なるを覺ふ而して荀卿は又堅賢を重
する理由に關し孟軻の見解を異にせり孟軻の意は聖人能
く本貝の性に率由志四端を存養せしか故に貴ふべしと云
ふにありと論せり蓋し一理あり而して荀卿は茲に根據志又
故なりと論せり蓋し一理あり而して荀卿は茲に根據志又
孟軻の性善説を駁し今將以禮義積偽為人^之性邪然則有
貴堯禹君子矣哉^{惡性}と斷せぬ
以上論述したる荀卿が所説及び駁孟に觀るも彼が頭腦孟
軻に比し更に大且精なるを悟る可し然れども其性惡説は
孟軻の性善説と同しく偏く人性を觀察したるものも梅可
可らず況んや等一説なるに於ちや固より一面真理の存す

四肢之於安佚也性也
 孟軻も時に口之於味也目之於色也荀御も希に難架紂不能去
 深く其性の發現せる根原を探究せざる欠點に因す固より
 先人が行為の一面のみを觀念之を根據となし立論し敢て
 其物を善或は惡なりと云へりしに拘はらず各々歴史的に
 性惡等一説をたせしに依る是れ二氏が天賦なりと説き性
 か善事行へ難く惡事學び易く世上善人少く惡人多きを見
 性の善なる一面のみを觀し性善等一説を爲し荀御は吾人
 云けざる可からず蓋し孟軻は自家の天に對する觀念と人
 和志たるか如きものに志て又人により多少の差異ありと
 吾人の見を以てすれば性は學ぶ二氏の意味する性を調
 ること否かへきにあらずと雖も抑て亦偏見たるを免かれ

民之好義と云へり志を見れば孟軻敢て性の惡に荀御敢
 て性の善に注意せずと斷する能はざるか如し然かれも
 如斯思想は二氏遺書中殆んど他に見ざる所學も無意識に
 發せる片言固より二氏の學說を左右するに足らずと云は
 人方穩當なる可三人若し是等の語句を引用し二氏が造
 の難點性善或は性惡等一説を辨護せんと呼はるものあら
 吾人は却て二氏ノ本旨を賊するものと呼はる何れは
 若し性善なると共に惡たり或は惡なると共に善たりと
 云ふか二氏の本意なりと云はし二氏の性理說各々其根
 ち失ふ可ければなり
 茲に題しん心理說と云ふは前節性理說に對しん云ののみ
 其二心理說と云ふは前節性理說に對しん云ののみ

此は現今普通に稱する心理學に比しては其範圍甚だ狭
少なる固より其理なりと雖も其思想は荀子全篇中に散見
殊に解蔽正名の二篇に鮮かに而も其議論の卓抜精緻な
る誠に儒學の夥多荀子の精華と稱するに足るべし而して
今其所説を窺くに頗る現時經驗派の唱しつゝある良心説
に類し又今其所識論として見る可きの点あり故に荀子の
所謂智識主として道徳上に關する者云ふも亦必ずしも然り
とは云ふべからず兎も此吾人をしん暫く二者を甄別し
て論せしめよ
智識論 心とは何ぞや荀卿の説に依り先づ其概要を云は
んか心者形之君嚴解にして居中虚治天官ものなり道之工
宰名正なり茲に彼は吾人智識の材質となるべき五官感覺を

心の活動的作用に歸し論じて曰く心不使焉則白黒在前而
目不見雷鼓左側而耳不聞嚴解と今其の意を反言せば心の活
動は人ば耳目に聳みのみのみと云ふにあり是れ敢て
彼が創見と稱す可らずと雖も更に論歩を進め心は何故に
又如何にして吾人が智識を形作るやとの問題を解釋せる
處に於て彼が卓識を優に認め得可きなり
荀卿は先づ虚壹静と此故に又大清明を以て心の本体的状
態なりと考へ心未嘗不藏註意註也然而有所謂虚心未嘗
不滿也然而有所謂一心未嘗不動也然而有所謂静と論じ
更に其理由を併せて虚壹静の何なるかを詳説して曰く人
生而有知而有志也者藏也然而有所謂虚不以已所藏
善所將受謂之虚心生而有知而有異也者同時兼知之同

而	發	に	ひ	を	り	也	外	次	又	實	思
知	す	心	鼻	辨	五	の	物	き	經	に	道
行	る	の	能	し	官	疑	に	に	駿	の	者
可	も	微	く	耳	の	問	接	荀	に	の	靜
也	の	知	香	も	依	を	す	脚	因	說	則
然	に	性	臭	て	用	說	れ	は	り	に	察
而	あ	に	芬	音	を	け	ば	心	智	依	<small>解</small>
微	ら	依	鬱	聲	籍	り	接	と	識	れ	<small>此</small>
知	す	る	を	清	り	其	す	外	を	ば	<small>註一</small>
心	故	然	嗅	濁	外	意	る	物	其	心	<small>者</small>
將	に	れ	く	を	物	に	や	と	中	は	<small>衍</small>
待	心	共	形	辨	を	謂	外	の	に	如	<small>字</small>
天	有	知	体	ず	感	へ	物	關	宿	斯	<small>に</small>
官	微	性	能	る	覺	ら	に	係	す	虛	<small>疑</small>
之	知	の	く	或	す	く	接	に	性	壹	<small>解</small>
當	則	作	倉	は	吾	心	す	論	能	靜	<small>之</small>
薄	緣	用	熟	口	人	微	れ	及	なり	に	<small>難</small>
其	耳	五	輕	能	が	知	何	し	と	し	<small>判</small>
類	而	官	重	く	目	注	故	心	は	す	<small>今</small>
然	知	形	を	甘	も	物	言	に	如	性	<small>或</small>
後	聲	体	覺	辛	て	而	心	智	何	を	<small>と</small>
可	可	存	ふ	鹹	形	言	之	識	に	先	<small>云</small>
也	也	し	る	酸	体	之	能	起	し	興	<small>へ</small>
五	緣	に	等	を	色	呂	召	る	し	し	<small>り</small>
官	目	起	一	味	理	あ	あ	て		ぬ	<small>め</small>

を	心	て	睡	り	物	害	り	義	劇	夢	時
以	の	夢	醒	壹	を	な	記	を	亂	儉	兼
て	本	劇	坐	統	同	く	臆	說	知	則	知
則	体	の	卧	一	時	又	と	か	謂	自	之
と	既	為	常	依	に	心	な	ん	之	行	也
た	に	に	に	用	兼	は	る	か	靜	使	然
す	虚	知	活	あり	知	知	も	蓋	其	之	而
と	壹	攪	し	一	と	性	心	し	言	則	有
説	靜	亂	つ	の	難	に	元	吾	言	謀	所
き	なる	せ	あり	知	も	子	來	人	旨	故	謂
將	か	す	と	を	是	り	虚	知	之	心	一
須	故	と	と	以	首	心	なる	惟	未	未	不
道	に	云	雖	て	脚	識	が	を	嘗	動	以
者	未	ふ	も	他	密	する	故	先	不	也	天
虚	得	に	所	の	な	所	以後	貝	動	也	一
則	道	ア	謂	知	同	一	の	す	也	然	害
入	而	り	靜	を	時	樣	託	る	而	有	此
將	來	而	止	害	論	な	臆	か	而	所	一
事	道	し	依	せ	氣	ら	を	故	有	謂	謂
道	者	て	用	す	の	す	念	に	所	靜	之
者	一	は	あり	又	許	と	又	茲	謂	不	壹
一	則	又	敢	心	さ	と	以	以	靜	以	心
則	盡	た	敢	は	と	説	て	其	不	夢	臥
將					所	る	起	要	以	夢	則

良	定	別	以	伸	或	は	斷	判	性	か	明
心	か	及	な	す	は	又	す	す	は	意	願
は	な	び	り	る	又	自	る	る	能	を	る
果	り	自	と	と	由	由	所	所	く	酌	軌
し		由	云	は	な	な	を	に	善	み	近
一		意	ふ	自	り	り	去	就	惡	其	良
圖		士	に	ら	自	之	り	き	正	義	心
滿		を	在	異	ら	之	之	之	邪	を	論
た		以	り	なり	令	を	行	を	を	敷	者
る		て	要	是	出	為	ふ	行	判	行	の
知		心	す	れ	す	さ	こ	ふ	別	せん	所
と		の	る	形	も	る	と	こ	し	か	記
意		主	い	の	敢	こ	と	と	意	心	に
を		要	彼	君	て	と	を	を	志	は	合
具		なる	は	に	他	違	違	は	能	知	致
し		依	善	し	に	は	す	又	く	意	す
必		用	惡	て	受	す	其	其	知	の	も
す		と	正	神	け	す	水	水	性	二	の
道		思	邪	形	す	其	故	故	の	能	なり
德		惟	の	仵	自	惡	に	に	善	力	今
的		せ	觀	の	ら	或	意	は	或	に	茲
判		る	念	主	禁	は	志	邪	は	成	に
別		こ	許	なる	止	邪	と	と	正	り	彼
を		と	に	所	し	と	と	と	と	知	

に	不	に	す	口	の	所	覺	乃	き	同	薄
て	も	せ	然	ツ	定	合	を	り	起	異	之
達	外	す	此	り	説	謂	以	と	す	也	而
する	官	又	も	智	と	之	て	云	は	証	不
か	の	彼	も	識	稱	智	直	ふ	外	名	知
等	心	は	荀	と	す	証	ち	に	物	と	心
に	の	外	御	は	る	を	に	歸	外	是	微
關	間	官	如	念	に	説	知	す	官	を	而
し	に	を	何	念	足	き	識	而	を	概	無
遂	如	經	に	の	る	め	と	し	經	言	説
に	何	て	し	結	而	言	乃	て	て	す	辨
全	なる	心	ん	合	し	簡	さ	彼	心	る	則
く	連	に	知	に	こ	なり	ず	ハ	に	吾	人
説	接	達	と	外	れ	と	學	此	連	人	莫
か	あ	し	と	乃	恰	雖	る	等	知	か	不
さ	る	心	が	ら	も	も	智	の	性	外	然
り	か	之	結	す	英	以	識	五	之	物	謂
き	如	を	合	云	國	て	の	官	を	に	之
回	何	認	す	へ	經	智	材	感	認	格	不
より	なる	識	るか	り	駭	識	質	覺	識	し	智
こ	れ	す	と	し	派	と	と	及	す	感	此
れ	彼	具	を	に	の	論	な	ひ	る	學	緣
彼	合	合	明	通	泰	者	有	形	か	而	以

の	欠	點	なり	之	雖	も	吾	人	は	之	を	以	て	難	せん	より	は	寧	ろ	其	所	
既	現	今	の	學	理	と	符	合	せ	る	點	に	當	め	る	を	補	せ	ん	と	欲	す
良	心	論	以	上	荀	卿	か	心	有	微	知	と	說	け	る	處	彼	か	智	識	論	と
て	見	る	を	得	可	し	然	れ	と	彼	か	心	理	を	談	せ	る	本	旨	は	茲	に
ら	す	し	て	寧	ろ	吾	人	は	如	何	に	し	て	積	偽	を	完	う	し	之	を	行
可	き	か	を	研	究	す	る	に	あ	り	茲	に	彼	は	心	的	要	素	と	し	て	知
外	に	能	く	知	性	の	是	認	す	る	處	を	行	ふ	へ	き	能	を	說	き	て	曰
以	知	之	在	人	者	謂	之	知	知	所	以	能	之	在	人	者	謂	之	能	証	さ	き
彼	か	萬	人	悉	く	可	以	知	仁	義	法	正	之	質	と	可	以	能	仁	義	法	正
と	を	先	貝	す	と	云	へ	り	し	は	即	ち	こ	の	知	或	は	微	知	と	能	と
せ	る	こ	と	明	か	なり	猶	ほ	是	を	心	理	學	上	の	科	語	に	藉	り	て	云
、	前	者	は	知	性	後	者	は	意	志	に	該	當	す	而	し	て	此	二	能	力	は

違	は	ず	又	之	が	躬	行	を	錯	ら	さ	る	性	能	な	り	や	と	云	ふ	に	荀	卿	は
是	を	然	り	と	し	良	心	を	以	て	絶	對	の	價	値	あ	り	行	為	の	唯	一	な	る
標	準	と	思	意	せ	し	が	如	し	こ	は	右	の	引	用	句	に	見	る	も	明	か	に	し
て	又	彼	か	常	に	堯	舜	禹	湯	周	公	孔	子	等	の	諸	聖	を	以	て	圓	滿	無	欠
なる	人	物	の	如	く	に	解	し	德	操	然	後	能	定	能	定	然	後	能	應	天	是	之	
謂	聖	人	學	勤	故	に	者	也	行	道	也	無	為	也	聖	人	之	行	道	也	無	疆	也	
と	云	ひ	以	て	聖	人	の	行	為	は	常	に	自	然	に	即	ち	為	さ	す	疆	へ	す	に
善	に	適	ふ	所	以	を	說	け	る	に	て	定	か	なり	吾	人	は	果	し	て	荀	卿	が	
思	惟	せ	る	聖	人	の	如	く	圓	滿	なる	境	涯	に	達	し	得	可	き	か	こ	心	良	
心	果	し	て	圓	滿	なる	性	能	に	發	達	し	得	る	や	否	や	の	問	題	に	於	て	
次	定	し	得	可	し	彼	は	經	驗	論	者	なり	心	知	道	則	可	道	と	雖	も	心	不	
知	道	則	不	可	道	而	可	非	道	路	と	說	き	積	偽	の	必	要	を	絶	叫	せ	し	は

の唯一なる標準たり然れども此能く積偽を完うせるが
 故たり生得の儘なる心は決して是の如く圓滿なるにあら
 ず謂は、無善無惡往々として而枝蔽塞の二大公患の爲に
 其判定誤り易く非道を可とする場合少からざるなり彼か
 意に謂へらく心枝無知傾則不精氣則疑惑古人が米々巻取
 不盈傾匡と謡しは何そや巻耳得易く傾匡充たし難からず
 得易きの巻耳を以て充たし難からざるの傾匡充たす能
 けざるや心枝すれはなり故に自古及未嘗有雨而能精者也
 また蔽塞の禍は惑其心亂其行冥々に行く人寢名を見て伏
 虎植林を望んで後人々爲すは何そや冥々蔽其明也醉者百
 歩の満を越えて頃歩の僧俯して城門を出て小閨を爲すは何
 ろや酒亂其神也蔽塞の主なるもの十日く欲惡始終遠金淺

博古今是れなり而して其禍害の大なるや單に個人に止ら
 ず往々にして國を誤る往古夏桀は未喜斯觀に蔽はれ關蓬
 を知らず穀討は姐己飛廉に蔽はれ微子啓を知らず是れ二
 王の九枚の地を衷ひ宗廟の國を虚にする所以して史公
 實に其例に乏しからず凡萬物異則莫不相爲蔽此心術之公
 患也參解而して彼は猶ほ茲に論歩を進め凡觀物有疑中心
 不定則外物不清吾慮不清則未可定然否也翻との自家心理
 的所見に立ち世俗の所謂鬼の心的迷妄に外ならず所以
 を説き併せて其理由を悟らす鬼の現實世界に生存するか
 如く恐怖する人を悲みて曰く彼遇者之定物以疑決必不當
 夫苟不當安能無過乎夏首之南有人焉曰涓蜀梁其爲人也愚
 而善畏明月而宵行俯見其影以為伏鬼也仰視其髮以為立魅

也皆而走此至其家失氣而死凡人之有鬼也必以其感忽之間
疑或之時正之此人之所以無有而有無之時也
代之思想をして其卓識を稱せざるを得ず然らば如何にし
てか、る心的迷妄を除去すべき積偽——道德的脩養
し以て心の二大公患たる兩枝蔽塞を除き疑惑を絶つに在
るのみ説次節教音これ彼が經驗論者なる所以にして孟軻の
天賦説性善四端先在説は自ら異なる所なり荀卿更に心
を盤水に譬喻して曰く人心譬如槃水正錯而勿動則濁在下
而清明在上則足下以見鬚眉而察理矣微風過之則湛濁動乎
下清明亂於上則不可以得大形之正也心亦如是矣故導之以
理養之以清物草傾之足以定是非決嫌疑矣小物引之則其正
外易其心内傾則不足以決庶理矣
彼カ心に關する觀念以

て知りぬ可し
知行合一説
心の如く心往々にして兩枝蔽塞の公患あり
心知性爲めに攪亂せら庶理を決する能はざることありと
雖も之を脩養するに其道を以てせば能く是非を定め嫌疑
を決するを得可く意志は忍ち其影響を受け知性の可と命
する處に就き不可と命する處を避くるを懲らざるなり而
して習い述べたる所に依り彼の意を酌みて云は、意志は
か、る場合に於て常に自由なる性能にして彼はこれと士
君子之勇或は上勇或は徳操と稱し義之所在不傾於權不顧
其利舉國而與之不為改視重死持義而不撓是士君子之勇也
能と説けりこれ孟軻の所謂浩然の氣と其依り用を同する

機	り	要	の	議	己	是	所	を	へ	ち	り
と	即	せ	活	る	主	に	不	利	り	知	陽
思	ち	す	動	に	義	依	可	己	し	是	明
意	蘇	蘇	を	性	に	り	知	的	も	行	か
し	氏	ラ	促	道	適	之	道	に	荀	的	未
人	は	テ	か	の	ふ	之	之	解	卿	主	有
類	無	テ	す	然	こ	之	之	見	の	意	知
の	智	ス	故	る	と	見	若	求	旨	行	不
道	を	カ	ナ	所	他	は	也	極	似	的	行
徳	以	知	と	以	若	は	不	及	せ	功	者
的	て	行	主	を	く	道	從	き	り	夫	知
欲	罪	合	張	知	も	の	者	情	然	知	不
求	惡	一	せ	は	の	可	無	性	れ	是	行
の	根	説	る	利	た	と	之	を	も	之	只
性	原	は	も	己	き	す	有	持	多	始	現
情	明	最	の	的	邊	べ	也	来	く	行	未
を	智	も	存	情	に	き		り	は	是	知
根	を	荀	る	性	末	所		凡	意	知	の
據	以	卿	と	茲	め	以		人	志	之	見
と	て	の	と	に	詳	を		又	の	成	地
た	徳	説	敢	勤	其	道		不	勤	と	に
し	行	に	て	き	理	の		從	機	云	立
論	の	似	言	意	は	利		其			
じ	の	た	を	志	由						
て	動	た			後						

に	全	斷	性	に	以	と	を	か	と	に	荀
は	く	に	の	意	禁	て	知	道	と	於	卿
常	知	聽	作	志	非	其	ら	に	解	て	け
に	性	き	用	の	道	の	さ	従	せ	常	そ
善	の	之	に	作	解	所	る	は	り	に	の
行	判	を	在	用	可	以	か	不	而	自	如
あ	定	履	り	に	道	を	為	徳	し	由	く
る	誤	行	費	屬	は	辨	の	を	は	内	脩
の	れ	す	に	す	撰	せ	み	行	茲	一	養
み	る	る	彼	而	擇	り	知	は	に	毫	に
決	か	作	の	し	力	曰	つ	さ	知	も	成
し	為	用	説	て	守	く	て	は	行	外	れ
イ	に	に	に	其	道	心	何	無	合	界	る
惡	し	し	依	依	或	知	之	智	一	の	意
意	て	吾	れ	働	は	道	を	に	證	誘	志
あ	荀	人	は	の	禁	然	行	し	を	惑	は
る	も	に	意	因	非	後	は	道	主	に	善
變	其	往	志	は	道	可	さ	徳	張	誤	に
じ	判	々	は	正	は	道	る	の	し	ら	就
し	定	惡	常	に	執	可	の	理	頻	る	き
云	正	行	知	知	意	道	の	な	り	と	惡
ふ	し	あ	性	道	に	然	何	き	に	と	を
に	か	ら	の	て	し	後	た	や	吾	な	去
あ	ら	は	判	ふ	共	守	る	か	人	し	點

曰く善福は(Ende Monia)即ち徳にして吾人の欲望する所
 是れ以外ならず吾人苟も善福の何れかを了解せば其行
 為必ずや徳に適ひ善福期して待つ可し然るに世人往々惡
 業に吸ひ敢て善福を求めざるは全く舞智なるか故なりと
 彼が終生一意眞智の開拓に従事せしはかゝる主義に立て
 るか故のみ正に荀卿が問學脩養に因り知識の練磨を説き
 しに合す固より蘇氏は善竟又陽明は良知の主觀的先在を
 認めしもの荀卿の經驗説と相容れざる點ありと雖も而も
 其知行合一説たるや一たり
 知行合一説果して維持するに足る可きか吾人は茲に少か
 らぬ眞理の含蓄するを認め人無智にして圓滿なる道徳家
 となる能はず知識の増長は明確に罪惡の減弱を示す然れ

之も之を以て明智必ず徳行と極言し得可きか夫の宗教家
 教育家者流の言に聽け其言や善且美然れども彼等か實際
 の行為は如何誠に吾人をして警慨せしむるにありや大
 思想家は時に邪心の怪物たるを免かれず笑のへコンは
 世界の最賢にして最劣なる人と呼べる世上豈此種の人に
 乏しからん然らば知行合一説維持し得可らざるにあり
 や吾人固より荀卿が一面孔孟に比し稍々智徳を明別せし
 を認め難む多くの場合に於て二氏と同一しく徳を主とす
 し能く徳を知るを以て上智と思惟し二者の間は甄別せし
 さ、りしを知る縦令かゝる意味の明智なるにせよ明智必
 す徳行と斷言し得可きか吾人の難んずる所は徳を知らず
 りは寧ろ之を行ふにあり吾人の固より荀卿は蘇陽二氏

其	心	て	余	念	の	一	如	と	其	さ	や
中	は	彼	等	或	觀	即	意	謂	所	り	を
に	知	カ	に	は	念	ち	心	は	可	し	説
存	意	情	就	自	行	道	と	さ	と	り	明
せ	組	心	更	他	判	續	情	可	言	考	せ
ず	成	の	に	の	別	的	性	可	し	然	さ
然	せ	範	説	行	及	脩	の	可	得	ら	ら
れ	ら	圍	く	為	自	業	關	可	可	ら	す
と	水	外	所	關	由	を	係	ら	ら	ば	す
も	た	に	乃	し	意	完		す	從	到	然
全	る	置	か	起	志	う	既	つ	て	在	れ
く	性	け	り	る	と	し	に	て	知	彼	と
情	能	る	き	自	掲	た	明	行	合	が	も
を	に	か	人	他	け	心	か	一	一	思	役
無	し	故	或	に	たり	の	なる	説	説	科	は
視	ん	なり	は	對	然	依	如	遂	遂	せ	真
し	性	と	云	する	れ	用	く	に	に	る	に
て	は	然	ん	褒	と	と	荀	能	能	能	能
道	異	り	こ	貶	も	し	御	く	く	く	く
德	り	彼	水	責	義	て	は	凡	凡	凡	凡
的	情	の	主	の	務	善	良	人	人	人	人
行	自	所	と	の	の	惡	心	莫	莫	莫	莫
為	ら	謂	し			正	一	不	不	不	不
を						知		從	從	從	從
説								す	す	す	す

果	全	連	確	に	志	性	固	難	の	敢	と
して	体	と	實	比	の	情	より	明	明	て	同
利	を	並	に	し	道	は	苟	智	二	じ	く
己	行	行	自	有	德	知	御	なる	者	の	徳
主	ふ	す	説	力	的	性	は	に	の	間	を
義	可	べ	を	な	活	に	蘇	せ	に	主	を
に	き	き	維	る	動	因	陽	よ	甄	を	主
適	もの	もの	持	所	を	り	二	明	別	を	主
し	なる	なる	せ	ある	強	道	氏	智	を	能	く
遂	か	か	ん	は	健	德	と	必	た	徳	を
に	を	又	は	決	た	の	稍	す	さ	徳	を
性	解	意	先	し	ら	最	々	徳	り	知	る
婦	釋	志	づ	否	し	も	所	行	し	を	知
を	せ	は	知	む	と	性	説	と	を	以	る
満	さ	必	性	可	信	を	を	斷	知	て	を
足	る	す	の	ら	せ	完	異	言	る	以	を
せ	可	知	發	す	る	了	に	し	得	上	を
し	ら	性	達	然	か	す	し	今	可	智	を
む	ぶ	の	は	れ	故	へ	本	其	き	と	を
る	又	判	必	と	に	き	の	の	か	思	を
もの	道	定	意	も	二	を	利	利	る	惟	し
なり	徳	する	志	荀	氏	感	己	己	意	思	し
	は	る	の	御	の	し	的	的	味	惟	し

水	動	能	れ	勤	法	と	行	的	る	最
夫	か	く	は	機	者	云	為	行	を	要
の	か	船	情	と	所	へ	の	為	判	具
力	す	体	は	と	得	り	勤	意	知	なり
なり	は	を	其	と	乎	し	機	志	せ	と
知	機	運	自	情	情	に	と	の	ば	観
は	關	轉	身	の		拘	して	活	性	じ
水	の	駛	到	依	無	は	情	動	情	吾
師	力	走	底	用	性	ら	性	自	に	人
情	に	せ	吾	兄	則	不	の	ら	屬	能
は	し	し	人	の	偽	又	依	成	す	く
蒸	能	む	を	如	之	彼	用	へ	欲	知
汽	く	る	善	く	無	は	を	し	求	性
に	其	の	に	大	加	時	無	と	の	以
い	進	力	導	なり	誦	に	視	の	念	て
し	路	あり	能	然	乃	情	す	説	恣	道
て	を	誤	力	此	と	或	る	に	に	徳
意	ら	さ	に	も	云	は	も	し	活	に
志	さ	ら	あ	彼	へ	性	の	て	動	か
は	ら	も	ら	の	り	を	持	は	を	る
機	ら	直	ず	説	ぬ	ち	来	は	起	効
關	し	接	蒸	に	行	か	り	決	し	験
の	か	之	氣	依	為	故	師	さ	道	あ
如	る	を	は		の	たり		る	徳	
し	は									

り	の	し	大	理	の	ら	に	用	軟	明
こ	念	が	大	學	質	存	幾	用	近	し
れ	或	故	は	者	惡	す	分	な	心	得
彼	は	に	を	の	の	る	か	る	理	可
が	自	偏	認	如	因	は	知	る	學	き
道	他	に	め	く	と	は	性	も	者	か
徳	に	利	り	道	た	明	の	善	の	知
を	對	己	然	徳	し	た	影	を	確	情
以	人	的	れ	的	心	る	響	行	信	意
て	人	快	も	行	以	事	を	ひ	す	の
畢	孰	樂	彼	為	外	實	受	悪	る	三
意	欲	主	は	意	に	た	け	を	所	者
す	得	義	情	志	之	ら	快	行	例	互
る	恣	の	を	活	を	す	苦	け	せ	に
に	而	上	欲	動	排	や	等	ず	善	相
利	守	の	求	の	した	苟	を	て	惡	連
己	其	念	之	勤	た	卿	感	ふ	の	結
的	所	と	を	機	るか	も	ず	意	判	し
快	不	し	説	と	如	縦	る	志	定	て
樂	可	て	き	し	き	令	情	の	は	行
を	以	之	敢	情	も	情	性	依	知	為
完	禁	を	て	の	一	を	の	用	性	起
う	其	説	義	依	般	以	依	あ	の	る
す	所	か	務	用	倫	て	用	る	の	と
る	可	さ				性	自	前	依	は

故に彼の説に從へは行為に於て三者其一を欠く可らず
雖も主とする所は直接の判定如何に在し情性の如何に在ら
す意志の如きは直接行為の動機と在るも雖も唯だ知性の
命に聽くのみは行知照一故に彼は時に智識の練磨は人性の
徳求的依用を幾分か節し得可しと説きしに拘はらず茲に
治亂の本を心の判定如何に歸し敢て欲求の多寡を云はせ
りしなり曰く心之所可中理則欲不來之其所在而求之其所
亡雖曰我得之失之矣証乃ち知るべし荀卿が矯飾或は積偽
を説きしは主とする所情の欲を減殺し變易し或は撲滅す
るにあらざる備に知意の開發にあることを故に彼は徒
らに去欲寡欲の目的を以て治を語るの無謀なるを説き
曰く凡語治而待去欲者無以道欲而困於有欲者也凡語治而

待寡欲者無以節欲而困於多欲者也証
今荀卿が性心との關係を孟軻の比するに孟軻の性は
心の本心は性の既發的能力なるか故に二者一にして共
に善而かも性は寧ろ心の嚮導者なり荀卿の心と性は自
ら異り二にして一ならず而して心知は本來無善無惡なり
とは云ひ脩養なき心を疑惑せしめ罷くまて惡に奔らん
する本能にして其自身は常に惡なり云はし此點より荀卿を心理
學上人間に對する二元論者なりと云はし孟軻は正に其一
元論者なりと云ひ得可し而して荀卿が二元説は恰かもカ
ント獨が道心(Sein des Heren)の外に感性(Sinnlichkeit)を説き
イ吾人は道心の命令に逆らふも時に物慾に奔らん
る傾ありと思惟せるに似たり又荀卿が性心二者本來の性

質上全く異なる能力なりと説きながら遂に心意志活動の因
を主として情に求めんとしたるはカントが感性と道心と
を劃然惡と善とに區別したから道德的行為の動機を大法
尊敬の念に歸し暗々裏に感性を持ち來れるに比し得可し
心理說畢

其三 教育說概要

教育の目的及價值 荀卿か教育の目的とする所は性情の
矯化より心の兩枝敵塞の二大常患を去るにあり教育の
價値とする所は能く此二大常患を除き萬人を同一様に
聖君子たらしめ得可きに在り彼以為らく干禍莫邪も砥礪
を加へされは利なる能はず人を力を得ざれば斷ずる能す又
其驕驕駟驪も前に衝轡の制なく後に鞭策の威なく加ふる

に造父の教を以てせざれば千里を致す可らず
學猶玉之於琢磨也 獸人性惡なるに抱けらるる心は可知之賢
と可能之具とに成り縦令本來無智無道往々にして蔽塞兩
枝の常患あるとはいひ積偽に因り萬人一様に聖君子たる
を得可し人に賢愚の差を生じ善惡の別あるに至りし所以
のものの一に積偽を心に致すと否とに關せずんばあらず
熟察小人之知能足以知其有餘可以為君子之所為焉
塗之人伏術為學專心一志思索熟察加日懸久積善而不息則
通於神明矣故聖人之所積而致也 獸と如何に彼が教育を重
せしかを見子以上彼が所説を伺ふに彼は何人も教育の力
かに籍らば聖人君子となり得可しと斷じ教育は人をい
善且つ賢ならしむる唯一全能なる方便なりと思惟せるか

以爲然則不能之與不可其不同遠矣性 彼性 心等一説の根拠に立ち敢て疑を容れざるべし況んや彼は性心等一説の根拠に立ち敢て疑を容れざるべし況んや
 固より茲に論理の矛盾あるなし然れども猶ほ吾人を以て
 直に此根拠を衡かしめよ人の日常の経験上許す所にあらざる
 るが如くに異なるは何人も日常の経験上許す所にあらざる
 や然らば教育は萬人をして一様に善且つ賢ならしむるに
 全能なる唯一の方便なりとの説遂に成立せざるや明かた
 り要するに彼が心性等一説の如きは遺傳進化の理を省み
 ず漠然類似の邊のみに着眼し之を基礎となし以て構成せ
 るものにして到底完全なる説と稱す可らず而して彼が教
 育の價値を過重せる難點亦茲に存するなり

如し然れども吾人が善且つ賢となる果して教育の力のみに
 なるか吾人は常の経験に徴するに人により教育の効力を
 異なるは明確なる事實にして或は左程の教育を受けさせ
 るも善或は賢と成る人あり或は之に反し如何に教育を受
 くるも到底善或は賢と成る能はざるの人あり又或は善と
 なるも賢と成る能はざる人あり賢と成るも善と成る能は
 ざるの人なり前節知行合一 此れ何ぞや荀卿は更に自説を維
 持せんとし曰く小人可以爲君子而不肯爲君子君子何以
 爲小人而不肯爲小人君子者未嘗不可以相爲也然而不
 相爲者可以而不可使也故塗之人可以爲禹足可以徧行天下
 未必然也雖不能爲禹無害可以爲禹足可以徧行天下然而未
 嘗有能徧行天下者也少 然則可以爲未必然也雖不能無害可

教育の方法 荀卿が教育の目的及び価値とする所に關する要點は既に述べたるが彼は又教育の方法として問學思
索集註の要を説き君子博學而日參考乎已則知明而行無過矣
積力又則人垢たり云へりしに定かなるが吾人は是を以て
多とすものなり何とすれば孔子既に説きし如く學ぶの
みにて思はされば固く思ふのみは學ばされば益なく又學
び且つ思ふと雖も集注なくんば心兩枝し蔽塞し疑惑を生
ず可ければなり然れども彼は性惡論者にして又良心經驗
論者なるが故に到底問學は彼が最も先務とする所なり其
言に曰く吾嘗終日而思矣不如須臾之所學也學勤と
また彼は外圍の影響が人心に及けず偉力を認め頻りに選

士擇郷の要を説き蓬生麻中不扶而直白沙在濕與之俱黑
故君子居必擇郷必就士所以防邪而近中正也
らに其意を敷衍して曰く夫人雖有性質美而心辯知必將求
賢師而事之擇良友而友之得賢師而事之則所聞者堯舜禹湯
之道也得良友而友之則所見者忠信敬讓之行也身日進於仁
義而不自知者靡習使然也今與不善人居則所聞者欺誣詐偽
也所見者汙漫淫邪負利之行也身且於刑戮而不自知者靡使
然也性既に彼はかくの如く人をせし賢愚善惡の差違あら
しむる主因を外圍の偉力に歸せり故に又特に師傳に就き
論し曰く學莫便乎近其人學之經莫速乎好其人勸凡治
氣養心之術莫要得師躰と而して師の資格四を致任篇に
説きい尊嚴而憚る者老而信の論説而不陵不犯(4)知微而論

又云いぬ
茲に荀卿が教育説を概評するに其説多くは穩當また其
議論の精細なる點に於て遂かに孔孟に勝れり然るも吾人
は彼が茲に旨と二氏の所説を遵奉せしが故に他所に比し
彼が劇見甚だ抑少殆んと見るに足らずと云ふも敢て不可
たきを信ず殊に彼が教育上採れりし主義に於て然るを認
む
教育の主義 荀卿か知而不仁不可仁而不知不可罷と云ひ
又た孔子を尊稱し孔子仁智且不散解なりと云へりしに察
すれば彼は如何にも智徳の二育を以て教育の本旨となし
二育を完ふせざれば直道之聖人と稱す可らずと思惟せし
か如し是れ孔孟に比し幾分か此に注意するの傾向ありと

雖も未だ全く然るにあらざし其主とする所は共に同じ
く二氏と共に徳育に在りて智育に無く智育と稱するもの
も多く道徳の上に関するなり故に曰く博學而無方道君子
不與勸積善成徳聖心備焉と彼が兩枝蔽塞の大患を防遏
すつき唯一の方便は實に茲に在るなり其言に曰く君子壹
於道則正 兼陳萬物而中懸衡道焉是故衆異不得相蔽以亂
其倫也 其意吾人專念道に壹れば心蔽せず道を標とな
し以て行為すれば心蔽塞せらば云ふに在りこれ彼が孔
孟と同しく道徳と稱せらるる所以なり故に彼は又二氏
の如く禮誡の如き規律を以て内外より交養せんと欲し治
氣養心之術莫徑由禮君子養心莫善於誡 誡なりと云へぬ然
れども彼は二氏が誠の如き規律を以て内外より交養せんと
欲し内面的規律

備也	學問	而	の	と	か	樂者	樂者	者	下	き	河
解	の	し	説	全	く	所	與	樂	之	たり	也
と	範	て	に	し	の	以	一	也	大	而	な
の	圍	荀	依	く	如	道	面	人	齊	し	む
理	を	卿	れ	樂	き	樂	矯	情	中	て	云
由	縮	は	は	を	理	也	正	之	和	彼	へ
に	少	禮	其	以	由	金	世	紀	之	は	り
倚	狭	尊	知	て	依	石	人	也	紀	禮	が
り	隘	の	驗	脩	り	衆	と	也	也	と	隆
萬	乃	極	末	身	尊	竹	と	也	樂	共	禮
物	し	禮	た	治	樂	所	と	也	易	に	主
の	め	以	の	國	説	以	と	也	風	樂	義
變	無	て	大	の	を	道	に	也	莫	の	なる
を	所	學	なる	一	主	徳	在	也	善	要	る
決	凝	問	い	要	張	也	り	也	於	説	こ
く	止	の	及	具	し	樂	し	也	樂	き	と
知	之	極	は	と	他	行	り	也	上	て	是
り	則	致	さ	乃	の	而	故	也	蓋	日	を
ん	没	と	る	然	道	民	以	也	し	は	以
と	世	思	なり	れ	徳	向	又	也	彼	は	て
す	窮	惟	り	と	的	方	曰	也	立	夫	知
る	年	し	大	も	諸	諸	曰	也	ち	樂	る
を	不	大		復	規	規	は	也	故	者	可
與	能	に			律	律	は	也	娛	天	可

拍	は	中	荀	脩	に	る	如	違	而	を	を
は	天	聲	卿	養	あ	へ	き	は	し	偏	主
り	下	之	は	に	り	き	性	正	て	重	と
お	之	所	此	及	は	に	善	に	彼	し	な
詩	道	止	の	ふ	先	荀	天	其	等	故	せ
書	華	也	如	が	づ	卿	賦	人	か	學	る
故	是	勤	く	理	の	の	論	性	か	至	い
不	矣	と	禮	の	禮	如	者	觀	く	乎	反
切	向	て	を	當	或	き	は	の	の	禮	し
勤	是	詩	車	然	は	性	内	差	如	而	禮
不	者	書	せ	乃	法	惡	心	違	き	止	の
道	減	を	り	れ	を	論	の	に	諸	矣	如
禮	倍	以	故	ば	以	者	發	基	規	夫	き
憲	是	て	に	は	て	に	揚	せ	律	是	又
以	者	禮	彼	書	外	し	に	と	の	之	希
詩	亡	と	は	者	部	心	注	云	價	謂	に
書	矣	共	書	政	を	經	意	ふ	値	道	法
爲	如	に	者	軍	柳	驗	し	可	に	徳	の
之	帛	學	料	之	制	論	仁	し	對	之	如
譬	云	料	の	紀	し	者	義	蓋	す	極	き
之	へ	三	大	也	以	た	を	し	る	と	外
猶	り	大	目	詩	て	る	説	孟	観	説	面
以	し	目	と	者	内	も	ける	軻	念	け	的
指	に	と			心	の	る	の	の	り	規
測					の				差		律

らさるか如きも暗々裏に人智の進歩は杜絶し、あるの
弊は敢て識者や待たずして明かに且つ道徳主義の弊も茲
に至りて極まりと云ふ可し然れども又道徳主義に能く道
徳を知るのみならず能く之を行はさる可からずと知り行
と合一せしむるが教育の効力なりと論して曰く不聞不
若聞之聞之不若見之見之不若知之知之不若行之學至於行
而止矣行之則明也効儒既に彼はかく道學を以て教育之本旨
とたし躬行を以て道學の價値となせり茲に彼は學問終り
あるも其旨義は常に確守せざる可らずと若其義則不
可須臾舎也爲之人也舎之禽獸也可断じぬ而して彼の説
に依れば君子の學と小人の學との別を生ずるは其義を舎

愚者若一丘と嘲けり其説に曰く將以窮逐無逐無極與其
抗骨絶筋終身不可相及也豈不識歩道者將以窮無窮逐無
極與意亦有所止之與躬然は何處に止むべきか曰はく止
諸至足曷謂至足曰聖也解彼の所謂聖は盡倫者にし禮を
完ふしたるの士なりは至足の禮なることと以て定かなり茲
に彼は聖として凡ての點に於て萬人に卓越せるにあらず唯
此正道主として禮に完きのみと論し君子之所謂賢者非能
徧能人之所能之謂也君子之辨之謂也君子之所謂察
謂也君子之所謂辨之謂也君子之辨之謂也君子之所謂察
者非能徧能人之所能之謂也君子之辨之謂也君子之所謂察
ある到底諸般の點に徧達熟通する能はざるを破せしか
故に此言を吐きしなり人而して是れ強かる難お可きにあ

つるに否に在り其言に曰く君子之學也入乎耳出乎口口
耳之間僅四寸耳曷足以美七天之軀哉

學

